

説教 『主の御手の感覚』 山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 59：1～2／マタイによる福音書 14：27～32

晴れの日、雨の日、穏やかな日、嵐の日。そしてこれらが混じり合ったなんとも絶妙な日、がある。こうした日々はそのまま人生の比喩となろう。そんな日々にあって、私たちの希望とは何か。何が救いなのか。古代インド思想や禅仏教では、世の実相は人間の幻だとし、この幻に囚われない「平穏な状態」をめざす。平穏を「救い」とする傾向はキリスト教にもあり、黙想修道会やクェーカー教徒はその代表。そう極端にならなくとも、私たちの救いイメージにも、漠然とした「平穏」があるだろう。

時は夕刻、弟子はイエスなしで湖へ漕ぎ出した(マタイ 14:23~24)。夜の航海は危険だが、弟子たちは漁夫だから、師の不在はたいして影響ない。ただ福音書は、ここに寓意を込めている。つまり闇の中(夜)、光(イエス)なしで未知へ踏み込む試練(船出)。弟子たちは強いられる試練(14:22)を恐れ、神経過敏になっていた。だから、人影を見ただけで「[幽霊だ]」といっておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた(14:26)。

錯乱する弟子たちにイエスは呼びかける。「安心なさい。わたしだ。恐れることはない(14:27)」。重々しい定型句「ego eimi=私は在る」はすなわち、光が闇を照らすこと。光による「安心せよ～恐れるな」という言葉で弟子たちの心は「平穏」になった。だがここからが始まりだ。ペトロは「平穏」に安住せず、大胆にも「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください(14:28)」と申し出る。イエスは「よし、やってみろ」という調子で「来なさい(14:29)」と答えた。子供が無鉄砲に試み、痛い目に泣き、思わぬ成果に歓ぶ様と似ている。「来なさい」と手を広げて迎えるイエスのまなざしは神のもの。父なるそのまなざしに見守られ、ペトロは踏み出した。

イエスのまなざしと「来なさい」という言葉を頼りに、ペトロは水の上を歩いて近づいた(14:29)。だが、すんでの所で己が身の状況が気になり、「[主よ、助けて下さい]」と叫んだ(14:30)。すると「イエスはすぐに手を伸ばして捕まえた(14:31)」。その際の「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか(14:31)」という言葉は冷やかなのではなく、「まったく、しょうがない奴だ」といった慈愛を含んだものだろう。

福音書は、光と言葉を受ける心の「平穏」と、手が差し伸べられる現実的な「平穏(14:32)」を語っている。ペトロは冒険し失敗して何を得たのか。私は想像する。ペトロの手にはしっかり自分を捕まえてくれたイエスの「手の感覚」が鮮烈に残っていた、と。この手の感触が、彼のその後を導いたと思う。十字架の折、他の弟子は霧散したが、ペトロは危険な場へ踏み入った(26:58)。嵐の湖上で捕まえてくれたイエスの手の感触が、ある種の痛みを伴って、いつそう奥の真実へと導いたのではないか。

「主の手が短くて救えないのではない(イザヤ 59:1)」。「むしろお前たちの悪が、神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させている(59:2)」。救いの御手を遠ざけるものは、私たちの悪と罪。自分の悪や罪を直視することは難しい。だが私たちは嵐に遭い、自分を拘束している妄想を知る(マタイ 14:26)。それを自覚し私たちは、父なる神のまなざしに守られ、子供のように冒険へ踏み出す。そして失敗を通して、主の御手の確かさを(イザヤ 59:1)、ペトロのように自らの手を介して覚える。



【おまけのひとこと】

いつまでも手に残っている感覚 これが道標となる 思想ではなく 分析でもない ただこの手が覚えていることに従おう 沈んだり浮かれたりする気分とはまるで違う キリストの確かな現実感